

# グローバルにいがた

## 国際交流拠点から

from

### 上海



黒田 員正さん

＝上海新潟県人会会員＝

## 遊園地も病院も混雑

世界第2位のGDPや13億の人口、爆買い、大気汚染、食の安全、日本との政治的な確執など、お隣の大国の話題は尽きません。昨今、中国経済の先行きを心配する声がありますが、上海に暮らしていると、その不安を感じさせないエネルギーを感じます。

6月16日には東京ディズニーランドとディズニーシーを合わせた倍の面積を有する上海ディズニーランドがオープンしました。入場券は約8千円、3月にはウェブサイトで申し込みの30分で500万のアクセスがあったそうです。オープン当初は開園3時間で入場打ち切りの措置も、中国全土から観光客が来て、年間3300億以上のお金を落とす、上海市の域内総生産を0.8%押し上げるという試算もあるそうです。

市内中心部から地下鉄で30〜40分、駅名も「ディズニー」で、ホームに降りた途端にディズニーのショップやおしゃれなレストランがあり、アメリカへ行った気分です。ショップには新製のお菓子メーカーの製品が、ディズニーデザインで販売されていました。医薬品を扱う仕事柄、医療機関を訪ねるの、当地の医療事情も少し紹介します。いつも感じるのは病院のスケールの大きさです。外来患者が1日で1万人を超す病院もあり、早朝より受付に患者さんが長蛇の列

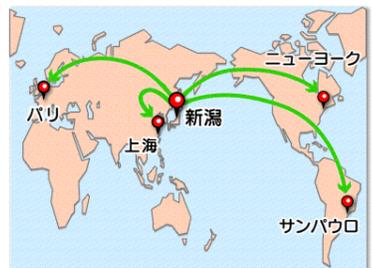
をなし、順番待ちに付く入るダフ屋もいるそうです。大混雑の中、特に小児科外来は両親まで付き添いで来てこられた返しています。

中国も高齢化が進み、60歳以上の人口が2億人を超えています。医療や福祉の充実向上が求められ、医療改革も進んでいます。地域や所得の格差が大きい国なので課題は多いようです。

私は新潟生まれではありませんが、デンカ生研の工場・研究所が五泉市にあることから、上海の新潟県人会にお声掛けいただき、当地で新潟の方々との交流を持っています。DENKAグループの青海工場(糸魚川市)のセメント製品も中国経済発展に寄与しています。活気あふれる上海にぜひお立ち寄りください。

(黒田さんは1959年生まれ。医薬品メーカー、デンカ生研が上海に置く現地法人の総経理です)

新潟日報社が開設した米ニューヨーク(NY)、ブラジル・サンパウロ、中国・上海、欧州(パリ)の国際交流拠点などを通じて、海外で暮らす本県関係者から現地の様子をレポートしてもらい、毎月第1月曜日に紹介しています。また、新潟日報ホームページ「モア」にも掲載し、感想や意見を受け付けています。



第1月曜掲載



6月にオープンした上海ディズニーランド。入場制限をかけた混雑を回避

from

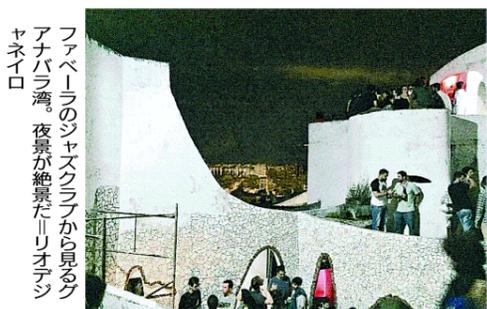
### ブラジル



小林 大祐さん

＝新潟市西蒲区出身＝

## スラムの集客増願う



ファベラのジャスコから見るグアナバラ湾。夜景が絶景だ。リオデジャネイロ

「車は細い路地に踏み出した。むき出しのレンガの壁が乱雑に絡む。赤ん坊の泣き声やテレビの音声が筒抜けだ。危険な気配はあまりない。それでも背後を気にしながら五分ほどクラブに着いた。扉の向こうは身動きが取れないほどいっぱいのお客様で埋まっていた。迷宮のような空間の中、ジャズ演奏が鳴り響く。らせん階段を上って屋上に出てみると、世界3大美酒に数えられるグアナバラ湾の夜景が眼下に広がった。世界に二つないジャスコクラブだ。ファベラの中には昨今、観光客が訪れる名所が誕生しているところもある。例えば、市内2カ所のファベラではロープウェイが運行している。基本的には住民の足だが、その眺めは絶景でTVDラマにも登場して話題になった。

注目されて人が集まることで治安向上と経済効果も期待できるはずだ。貧しく危険なだけではないファベラが増えているのは、リオデジャネイロは、さらなる魅力的になる。

(小林さんは1974年生まれ。ブラジルで国際協力機構のコーディネーターとして地域警察活動を支援しています)

「リオデジャネイロはなぜ私たちを魅了するのか。そんな疑問を解き明かしたという本が刊行された」と知り、興味を持った。書名は「リオデジャネイロという生き方」。章立てをインターネットの販売サイトで確認すると、「自然と混雑一体になった珍しい大都会」「常に未来を向いているという自信」など、その一つ一つがリオの土地の魅力と住人の気質が反映され、納得させられた。

「危険ではくれないファベラ」という表現にも目が留まった。ファベラとはスラムのこと。リオのあちこちの斜面に広がる様子は圧巻だ。先日、その一つを訪ねる機会があった。目的は毎月第1金曜日の夜だけ営業するジャスコクラブ。経営者はキリスト教系でも外国人観光客が多いとの情報だ。クラブは丘の上に建つ。蛇のようにつながった急な坂を乗り合いバスで上った。途中、すしレストランを発見した。ファベラにすしレストランがちらほら開店しているとは聞いていたが、見たのはこれが初めてだった。

「車は細い路地に踏み出した」と言われ、細い路地に踏み出した。むき出しのレンガの壁が乱雑に絡む。赤ん坊の泣き声やテレビの音声が筒抜けだ。危険な気配はあまりない。それでも背後を気にしながら五分ほどクラブに着いた。扉の向こうは身動きが取れないほどいっぱいのお客様で埋まっていた。迷宮のような空間の中、ジャズ演奏が鳴り響く。らせん階段を上って屋上に出てみると、世界3大美酒に数えられるグアナバラ湾の夜景が眼下に広がった。世界に二つないジャスコクラブだ。ファベラの中には昨今、観光客が訪れる名所が誕生しているところもある。例えば、市内2カ所のファベラではロープウェイが運行している。基本的には住民の足だが、その眺めは絶景でTVDラマにも登場して話題になった。

注目されて人が集まることで治安向上と経済効果も期待できるはずだ。貧しく危険なだけではないファベラが増えているのは、リオデジャネイロは、さらなる魅力的になる。

(小林さんは1974年生まれ。ブラジルで国際協力機構のコーディネーターとして地域警察活動を支援しています)

「リオデジャネイロはなぜ私たちを魅了するのか。そんな疑問を解き明かしたという本が刊行された」と知り、興味を持った。書名は「リオデジャネイロという生き方」。章立てをインターネットの販売サイトで確認すると、「自然と混雑一体になった珍しい大都会」「常に未来を向いているという自信」など、その一つ一つがリオの土地の魅力と住人の気質が反映され、納得させられた。

「危険ではくれないファベラ」という表現にも目が留まった。ファベラとはスラムのこと。リオのあちこちの斜面に広がる様子は圧巻だ。先日、その一つを訪ねる機会があった。目的は毎月第1金曜日の夜だけ営業するジャスコクラブ。経営者はキリスト教系でも外国人観光客が多いとの情報だ。クラブは丘の上に建つ。蛇のようにつながった急な坂を乗り合いバスで上った。途中、すしレストランを発見した。ファベラにすしレストランがちらほら開店しているとは聞いていたが、見たのはこれが初めてだった。

「車は細い路地に踏み出した」と言われ、細い路地に踏み出した。むき出しのレンガの壁が乱雑に絡む。赤ん坊の泣き声やテレビの音声が筒抜けだ。危険な気配はあまりない。それでも背後を気にしながら五分ほどクラブに着いた。扉の向こうは身動きが取れないほどいっぱいのお客様で埋まっていた。迷宮のような空間の中、ジャズ演奏が鳴り響く。らせん階段を上って屋上に出てみると、世界3大美酒に数えられるグアナバラ湾の夜景が眼下に広がった。世界に二つないジャスコクラブだ。ファベラの中には昨今、観光客が訪れる名所が誕生しているところもある。例えば、市内2カ所のファベラではロープウェイが運行している。基本的には住民の足だが、その眺めは絶景でTVDラマにも登場して話題になった。

注目されて人が集まることで治安向上と経済効果も期待できるはずだ。貧しく危険なだけではないファベラが増えているのは、リオデジャネイロは、さらなる魅力的になる。

(小林さんは1974年生まれ。ブラジルで国際協力機構のコーディネーターとして地域警察活動を支援しています)



文化のメルティングポット(融合)、ニューヨーク。街には英語、スペイン語、中国語が混ざり合って響く

from

### NY



浜田ドゥーガン知子さん

＝新潟市江南区出身＝

## 異文化に驚くばかり

「私たちが家族が東京からニューヨークに引っ越したのは二十数年前の、記録的な厳しい冬だった。ひと冬中ずっと肩が凝り、凍った新巻きザケのような気分だった。ようやく夏になると、街は観光客でいっぱいになった。人々の持つショッピングバッグが、乳母車の息子の頭にカンカンぶつかってくる中を、ひやひやしながら歩いた。「生き馬の目を抜くニューヨーク」ともいわれる不安定な日々だった。その夏、私は映画のワンシーンのような光景を目にした。アップル・ストリート、のどかな午後、息子と私は交差点で信号待ちをしていた。歩行者と車の流れが、一斉に止まり、地球が「ほ」と一息ついたかのような錯覚を感じたその時だった。XXXXXX!。インラインスケートを履いた30代前半に見える金髪の女性が、交差点の真ん中で何かののしっていた。「あ、危ない。そして私の視線は彼女の頭と足元の間を2往復した。」「ない? 何も着ていない!」私の意識は異次元まで飛び、次の瞬間、嵐のようなクラクションの音でわれに返った。警察官が2人、交差点に飛び出し「ホールドアップ!」。1人は銃を構えている。乳母車に乗った息子と私の目の前5分である。私は乳母車を押し、息子の顔を見た。平穏な表情だ。彼の世界では何も起こらなかつたらしい。ほっとしたが、歩くうちに体中に震えがきた。

息子も今は社会人となり、その後アメリカで生まれた娘も大学に進学した。考えてみると、30代後半でアメリカに渡り、いろいろなカルチャーショックを受けてドキマギしていたのは私だけだった。子供たちは逆に、新潟に帰るたびにカルチャーショックを受けている。電車が清潔で時間に正確なこと、タクシの運転手さんの対応が丁寧なことなど。

もちろん私は二十数年間でアメリカの良い面もたくさん知ることができた。いくつか機会をいただければ、そんなこともお伝えしたい。(浜田さんは1956年生まれ。結婚により移住し、現在はニューヨークのジャパソサエティで、交換留学生の日本語教育プログラムに携わっています)

「私たちが家族が東京からニューヨークに引っ越したのは二十数年前の、記録的な厳しい冬だった。ひと冬中ずっと肩が凝り、凍った新巻きザケのような気分だった。ようやく夏になると、街は観光客でいっぱいになった。人々の持つショッピングバッグが、乳母車の息子の頭にカンカンぶつかってくる中を、ひやひやしながら歩いた。「生き馬の目を抜くニューヨーク」ともいわれる不安定な日々だった。その夏、私は映画のワンシーンのような光景を目にした。アップル・ストリート、のどかな午後、息子と私は交差点で信号待ちをしていた。歩行者と車の流れが、一斉に止まり、地球が「ほ」と一息ついたかのような錯覚を感じたその時だった。XXXXXX!。インラインスケートを履いた30代前半に見える金髪の女性が、交差点の真ん中で何かののしっていた。「あ、危ない。そして私の視線は彼女の頭と足元の間を2往復した。」「ない? 何も着ていない!」私の意識は異次元まで飛び、次の瞬間、嵐のようなクラクションの音でわれに返った。警察官が2人、交差点に飛び出し「ホールドアップ!」。1人は銃を構えている。乳母車に乗った息子と私の目の前5分である。私は乳母車を押し、息子の顔を見た。平穏な表情だ。彼の世界では何も起こらなかつたらしい。ほっとしたが、歩くうちに体中に震えがきた。

息子も今は社会人となり、その後アメリカで生まれた娘も大学に進学した。考えてみると、30代後半でアメリカに渡り、いろいろなカルチャーショックを受けてドキマギしていたのは私だけだった。子供たちは逆に、新潟に帰るたびにカルチャーショックを受けている。電車が清潔で時間に正確なこと、タクシの運転手さんの対応が丁寧なことなど。

もちろん私は二十数年間でアメリカの良い面もたくさん知ることができた。いくつか機会をいただければ、そんなこともお伝えしたい。(浜田さんは1956年生まれ。結婚により移住し、現在はニューヨークのジャパソサエティで、交換留学生の日本語教育プログラムに携わっています)

「私たちが家族が東京からニューヨークに引っ越したのは二十数年前の、記録的な厳しい冬だった。ひと冬中ずっと肩が凝り、凍った新巻きザケのような気分だった。ようやく夏になると、街は観光客でいっぱいになった。人々の持つショッピングバッグが、乳母車の息子の頭にカンカンぶつかってくる中を、ひやひやしながら歩いた。「生き馬の目を抜くニューヨーク」ともいわれる不安定な日々だった。その夏、私は映画のワンシーンのような光景を目にした。アップル・ストリート、のどかな午後、息子と私は交差点で信号待ちをしていた。歩行者と車の流れが、一斉に止まり、地球が「ほ」と一息ついたかのような錯覚を感じたその時だった。XXXXXX!。インラインスケートを履いた30代前半に見える金髪の女性が、交差点の真ん中で何かののしっていた。「あ、危ない。そして私の視線は彼女の頭と足元の間を2往復した。」「ない? 何も着ていない!」私の意識は異次元まで飛び、次の瞬間、嵐のようなクラクションの音でわれに返った。警察官が2人、交差点に飛び出し「ホールドアップ!」。1人は銃を構えている。乳母車に乗った息子と私の目の前5分である。私は乳母車を押し、息子の顔を見た。平穏な表情だ。彼の世界では何も起こらなかつたらしい。ほっとしたが、歩くうちに体中に震えがきた。

息子も今は社会人となり、その後アメリカで生まれた娘も大学に進学した。考えてみると、30代後半でアメリカに渡り、いろいろなカルチャーショックを受けてドキマギしていたのは私だけだった。子供たちは逆に、新潟に帰るたびにカルチャーショックを受けている。電車が清潔で時間に正確なこと、タクシの運転手さんの対応が丁寧なことなど。

もちろん私は二十数年間でアメリカの良い面もたくさん知ることができた。いくつか機会をいただければ、そんなこともお伝えしたい。(浜田さんは1956年生まれ。結婚により移住し、現在はニューヨークのジャパソサエティで、交換留学生の日本語教育プログラムに携わっています)

from

### パリ



水島 優さん

＝新潟市出身＝

## カメラ市で歴史体感



年代も価格もさまざまなカメラや写真が並び、パリ郊外のカメラ市

「カメラ・オプスキュラというカメラの元となったものがあるが、原理自体は紀元前から発見されており、15世紀にはレオナルド・ダ・ヴィンチが使っていた記録が残っている。日本で写真というと芸術とは別ジャンルとして確立しているがフランスでは芸術の一つとして当たり前のようにつまみ食いされている。それは現在のカメラが芸術表現の追求をする過程で生まれた技術と共に歩み続けてきたからだ。フランスに住む13年になるが、近年では写真を使って銅版画の版を作り、ハイター法という技術でプリントしている。いわゆる普通の写真とは違う表現をしているのだが、写真そのものが持っている良さというのを改めて見るいい機会になった。歴史の持つ面白さをとて身近に体感できるのは、本当に素晴らしいことだと思っ」

(水島さんは1983年生まれ。フランスを拠点にしている写真家です。故郷の新潟市でワインテリジ自転車イベントの企画・運営にも携わっています)

「フランスは写真の国である。そう言うって分かる人は相当な写真好きだろう。ダゲールがパリで写真を発明したのが1839年。驚くことに写真が日本に入ってきたのは西洋絵画や西洋音楽よりも先である。世界で最初に映画が作られたのもフランスで、発明したリュミエール兄弟は世界初のカラー写真も作っている。それが何とも面倒な方法なのだが、その独特な色彩の美しさは今見ても驚くほどだ。

つい最近、パリの郊外にあるピエールという街で行われた世界で一番大きいカメラ市に行ってきた。現行モデルはもちろん、今は製造されていないフランス製のカメラ、ライカなどの高級品、映画用機材など、マニアが喜びそうな物がたくさんある中で、これぞフランスという物をいくつか見つけた。例えば、写真ができる前に使われていた、ガラスに絵を書いて投影する幻灯機。木製の大型カメラや、古いモノクロ写真から、モノクロとカラーのガラス乾板もあった。

一方で、最新デジタル写真のブースも出ていた。ここに来るだけで、写真の生まれる前から現在の写真に至るまでの歴史を生で見ることができ、そして気に入れば普通に買うことができる。

カメラ・オプスキュラというカメラの元となったものがあるが、原理自体は紀元前から発見されており、15世紀にはレオナルド・ダ・ヴィンチが使っていた記録が残っている。日本で写真というと芸術とは別ジャンルとして確立しているがフランスでは芸術の一つとして当たり前のようにつまみ食いされている。それは現在のカメラが芸術表現の追求をする過程で生まれた技術と共に歩み続けてきたからだ。フランスに住む13年になるが、近年では写真を使って銅版画の版を作り、ハイター法という技術でプリントしている。いわゆる普通の写真とは違う表現をしているのだが、写真そのものが持っている良さというのを改めて見るいい機会になった。歴史の持つ面白さをとて身近に体感できるのは、本当に素晴らしいことだと思っ」

(水島さんは1983年生まれ。フランスを拠点にしている写真家です。故郷の新潟市でワインテリジ自転車イベントの企画・運営にも携わっています)

「フランスは写真の国である。そう言うって分かる人は相当な写真好きだろう。ダゲールがパリで写真を発明したのが1839年。驚くことに写真が日本に入ってきたのは西洋絵画や西洋音楽よりも先である。世界で最初に映画が作られたのもフランスで、発明したリュミエール兄弟は世界初のカラー写真も作っている。それが何とも面倒な方法なのだが、その独特な色彩の美しさは今見ても驚くほどだ。

つい最近、パリの郊外にあるピエールという街で行われた世界で一番大きいカメラ市に行ってきた。現行モデルはもちろん、今は製造されていないフランス製のカメラ、ライカなどの高級品、映画用機材など、マニアが喜びそうな物がたくさんある中で、これぞフランスという物をいくつか見つけた。例えば、写真ができる前に使われていた、ガラスに絵を書いて投影する幻灯機。木製の大型カメラや、古いモノクロ写真から、モノクロとカラーのガラス乾板もあった。

一方で、最新デジタル写真のブースも出ていた。ここに来るだけで、写真の生まれる前から現在の写真に至るまでの歴史を生で見ることができ、そして気に入れば普通に買うことができる。

カメラ・オプスキュラというカメラの元となったものがあるが、原理自体は紀元前から発見されており、15世紀にはレオナルド・ダ・ヴィンチが使っていた記録が残っている。日本で写真というと芸術とは別ジャンルとして確立しているがフランスでは芸術の一つとして当たり前のようにつまみ食いされている。それは現在のカメラが芸術表現の追求をする過程で生まれた技術と共に歩み続けてきたからだ。フランスに住む13年になるが、近年では写真を使って銅版画の版を作り、ハイター法という技術でプリントしている。いわゆる普通の写真とは違う表現をしているのだが、写真そのものが持っている良さというのを改めて見るいい機会になった。歴史の持つ面白さをとて身近に体感できるのは、本当に素晴らしいことだと思っ」

(水島さんは1983年生まれ。フランスを拠点にしている写真家です。故郷の新潟市でワインテリジ自転車イベントの企画・運営にも携わっています)

### 究極の趣味人

会津八一と川喜田半泥子

石水博物館(三重県津市)所蔵の会津八一の書画作品(半泥子旧蔵)や川喜田半泥子との往復書簡をはじめ、2人の油絵、墨蹟、さらには半泥子作陶の焼き物作品、川喜田家旧蔵美術コレクションなどを展示。芸術の世界に遊んだ2人の豊かな感性を紹介いたします。

▼7月15日(金)・9月25日(日) ※月曜休館(祝日の場合は翌日。ただし9月20日は開館) ▼新潟市会津八一記念館、にいがた文化の記憶館(メディアシップ5階) ▼前売り券一般のみ600円、当日一般800円、大学生400円、高校生200円、小中学生100円

会津八一記念館、025(282)7612

### 松竹大歌舞伎秋季公演

市川猿之助ら豪華キャストを迎え、松竹大歌舞伎の公演を開催します。舞台上を飛ぶ宙乗りや、一人が早変わりして役を演じ分ける演出をお楽しみください。

▼10月2日(日) 夜の部 午後4時30分開演 新潟県民会館大ホール(新潟市中央区) ▼10月3日(月) 朝の部 午前10時30分開演 市川猿之助、坂東三右衛門さん(つぎ) ▼市川猿之助、坂東三右衛門さん(つぎ)

### マランド楽団

ダンス・ミュージックの名門、マランド楽団のコンサートを開催します。郷愁に満ちたメロディーと情熱的なダンスに酔いしれてください。

▼7月13日(水) 午後7時 上越文化会館(上越市新光町) ▼全席指定5000円(当日5000円増し) ※未就学児の入場不可 ▼インフォメーションセンター(メディアシップ1階) などでも販売。NIC新潟日報販売店でも取り次ぎます

会津八一記念館、025(249)8878

### 新潟日報事業案内

新潟日報社

〒950-0809 新潟市中央区柳ヶ丘2番10号

TEL 025-247-0088

FAX 025-247-0088

新潟市中央区水島町3-23

TEL 025-247-0088

FAX 025-247-0088

### まむし

健康の源(純正粉末)

株式会社 長井水車

025(536)2309(代)

FAX 025(536)4061

上越市柿崎区旭町

### マツキドライビングスクール

みんなの学校 新潟西しばた校

大型・大型二種・大型特殊・牽引

訓練費用の最大20%給付!!

教育訓練給付金制度コース開設

普通・中型・普通二種・大型二種

随時教習生募集

025(247)2724

### 美術品 買います

なんでも鑑定 売買 長美堂

新潟市中央区万代島5-1 万代島ビル2F エントランスロビー

025(247)2724

### 佐潟荘

精神科 内科

新潟市西区赤塚5588

電話025-239-2135代

http://www.sagatosou.com

### 現金買取

●家具、電気製品、事務用品

●建具、サッシ

●骨董、その他(新品・古物)

家の解体、引越、不用品の整理の際は御一報ください。見積りは無料です。

リサイクル山良

〒950-0809 新潟市中央区柳ヶ丘2番10号

☎(025)275-7592

### 特許 意匠・商標

弁理士 牛木 新 義 護

〒950-0809 新潟市中央区水島町3-23

TEL 025-247-0088

FAX 025-247-0088

### 霜華堂

高橋金蔵

〒950-0809 新潟市中央区水島町3-23

TEL 025-247-0088

FAX 025-247-0088